

まじあそび

rcrc.ryukoku.ac.jp

【発行日】

2020年9月28日

【編集・発行】

龍谷大学 矯正・保護総合センター



2019-2020年の活動を振り返って

龍谷大学

矯正・保護総合センター長

浜井 浩一

矯正・保護総合センター長となって2年目を迎え、慣例に従い2019年を振り返りつつ、この1年間のセンターの活動についてご報告させていただきます。

当センターは、2010年に矯正や更生保護に関する教育実践としての矯正・保護課程と研究機関としての矯正・保護研究センターを統合し、新たに社会貢献活動を付け加えて開設されました。

教育活動としての矯正・保護課程も2019年度の総受講者数は2,524人となり、直近5年間の平均も2,500人を超えるなど順調に推移しています。研究活動についても、2019年度末には、団藤文庫プロジェクトから『團藤重光研究(日本評論社)』と刑事立法プロジェクトから『刑事施設の医療をいかに改革するか(日本評論社)』が刊行されるなど着々とその成果を積み上げつつあります。

また、センターでは、社会貢献活動にも積極的に挑戦しています。2019年6月1日には、法務省主催・ヤフー株式会社共催によるイベント「刑務所・少年院×立ち直り・地方創生アイデアソン(通称:ケイムション)」にセンター長が参加しました。これは、法務省と民間とが協力して矯正処遇の充実に向けてアイデアを出し合うもので、採用されたアイデアは政策として実現されることになっています。また、12月7日には、アイデアソンの学生版である「法務省政策提案ワークショップ 社会人×学生」が開催され、センターからも4人の法学部生を派遣しました。そこで採用されたアイデアは、延期が決定されました京都コンgres(第14回国連犯罪防止刑事司法会議)において学生が報告することになっています。

7月28日には、龍谷大学において第69回「社会を明るくする運動」伏見地区大会を伏見地区保護司会などと

もに共催しました。この大会では、落語家で天台宗僧侶の露の団姫さんを講師に、「一隅を照らす」というテーマでの講演が行われたほか、センター長がセンターの活動報告を行うとともに龍谷大学の学生が組織する深草BBS会によるボランティア活動などの紹介も行われました。

12月21日には、龍谷大学響都ホール校友会館において第9回矯正・保護ネットワーク講演会を開催し、「居場所と出番」をテーマにNPO法人抱樸理事長の奥田知志さんにご講演いただきました。講演の最後には、現在、奥田さんが更生を支援している下関駅放火事件の当事者でもある福田九右衛門さんにもご登壇いただき、現在の生活の様子や心境などについて話していただきました。当日は300人を超える方が参加し、奥田さんと福田さんの話を通して支援があれば人は更生できることを実感していただけたのではないかと思います。

2020年1月15日には、立正大学法学部と連携・協力に関する協定を締結しました。今後は、東京にキャンパスを持つ立正大学法学部との教員や学生の交流を通して、矯正・保護分野の教育・研究の発展に寄与するとともに、手を携えて矯正・保護分野のさらなる発展に努めて参りたいと考えています。

さらに、2019年度は、社会貢献活動の一環として、センター関係教員を学外の講演会や研修会などの講師として派遣するとともに、センター長が、法務省の再犯防止推進モデル事業(鹿児島県奄美市、愛知県、北海道)に学識経験者として参加したり、奈良県や奈良市主催の再犯防止に係る条例案を作成するための更生支援委員会の委員または座長として参加することで、研究成果の社会実装を実現するために地方自治体における再犯防止の取り組みにも積極的に協力しました。

矯正・保護総合センターは、2019年度が終了した段階で満10歳の節目を迎えたこととなります。この10年の経験を踏まえ、2020年度以降は、教育、研究、社会貢献のさらなる充実に向けていきます。引き続きよろしくお願いいたします。



龍谷大学
RYUKOKU UNIVERSITY



センター主催 第9回矯正・保護ネットワーク講演会

2019年12月21日に開催しました第9回矯正・保護ネットワーク講演会では、NPO法人抱樸理事長の奥田知志氏をお迎えし、「『居場所と出番さえあれば人は更生できる』～下関駅放火事件を例に考える～」と題して、ご講演をいただきました。そして、講演の最後に、奥田氏が更生を支援している下関駅放火事件の当事者である福田九右衛門氏にもご登壇いただき、現在の生活の様子や心境などを伺いました。当日は300名を超える方々にご参加いただき、講演会は盛況のうちに終了することができました。

「『居場所と出番さえあれば人は更生できる』 ～下関駅放火事件を例に考える～」

講演者 **奥田 知志氏** (NPO法人抱樸理事長)

開催日時／2019年12月21日(土) 13時30分～15時35分

開催場所／龍谷大学 響都ホール 校友会館

●開催趣旨

龍谷大学は、100年以上に及ぶ浄土真宗本願寺派の宗教教誨を基盤としながら、1977年に刑事政策に特化した教育プログラムとして、矯正課程（現在の矯正・保護課程）を設置しました。それ以来、刑務官や法務教官、保護観察官などの専門職のほか、保護司や篤志面接委員、BBSなどのボランティアの養成に努めて参りました。

また、2001年には、矯正・保護についての学術研究を推進する矯正・保護研究センターを設置しました。この研究センターは、2002年度からは、文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業（AFC）に採択され、8年間にわたり研究活動を行ってきました。

2010年には、矯正・保護総合センターを開設し、矯正・保護課程の教育活動と研究センターの研究活動との有機的な統合をはかることとしました。さらに、矯正・保護の分野における社会貢献活動も、事業の柱として明確に加えることとしました。その一環として、2011年度から矯正・保護ネットワーク講演会を開催させていただいております。この講演会は、矯正・保護の実務家や関係する行政機関、民間団体、企業家、専門職の方、地域の方など、矯正・保護の問題に関心を寄せる多様な人々に対し、それぞれの思索と相互理解を深めるため、議論・研修の場として提供させていただいております。

今回は、奥田氏をお招きし、これまで多くのホームレスの人々を支援してきたご自身の経験と活動に基づき、「居場所」と「出番」の重要性についてご講演いただきます。

そして、講演の中で、奥田氏が実際に更生を支援している下関駅放火事件の当事者である福田九右衛門氏にも登壇してもらい、実際の姿を見てもらいたいと思います。

この講演を通して、「居場所」と「出番」さえあれば、人は変わる（立ち直る）ことができるということを皆さんに改めてかみしめていただければ幸いです。

●プログラム

- 挨拶・趣旨説明・講演者紹介
浜井 浩一（龍谷大学矯正・保護総合センター長・法学部教授）
- 講演
講演者 奥田 知志氏（NPO法人抱樸理事長）
- 質疑応答

●後援

京都府、京都市、浄土真宗本願寺派、京都保護観察所、京都弁護士会、京都府保護司会連合会、京都府更生保護女性連盟、更生保護法人京都府更生保護協会、京都BBS連盟

はじめに ～ホームレスの実情と下関駅放火事件（福田九右衛門氏）との出会い～

○講師紹介者 最初に下関駅放火事件を起こした方（福田九右衛門さん）が3年前に出所された当時のドキュメンタリーを見ていただき、その後、奥田さんにこれまで何があったのか、どんなふうに過ごしてきたのかということについて、お話していただきたいと思っています。

本日、福田九右衛門さんにも来ていただいています。講演の最後に、実際に福田さんの姿を皆さんに見ていただくことで、その姿というか、ちゃんと居場所があれば、ちゃんと出番があれば、人は幸せに生きていける。幸せに生きてさえいけば、人は罪を犯す必要なんかないということを知っていただけるのではないかとというふうに考えております。

それでは、講演の方を始めさせていただきますので、ご静聴をお願いします。

講演者が実際に出演されたドキュメンタリー番組を約25分上映

(ドキュメンタリー番組上映後、講演者が登壇)

皆さんこんにちは。奥田知志と申します。2012年に1度、ここに呼んでいただきまして、お話をさせていただきました。その後、下関駅放火事件の当事者である福田さんが、いまから3年前に出所されて、その後どうなったのか、そのとき、ここにいた方がどれだけいるのか分かりませんが、お話をしたいと思ってまいりました。

私は、NPO法人抱樸という団体の代表をしております。本職は、実は牧師で、明日はクリスマス礼拝なのにいいのかと思いつつ、ここに寄せていただきました。

もともと滋賀県大津市が私の実家がありまして、京都は私のふるさとでもあります。私は31年前にホームレスの支援を始めました。なぜ刑務所から出てきた人たちの支援、これを更生保護という言い方をしますが、更生支援をやるようになったかという、この事件が実はきっかけではなくて、実はホームレス状態の方々の中に、相当数、刑務所から出てきて、そのままホームレスになっているという人がいるということ、活動の当初から気が付いていたんです。

「あなたは1週間前どこにいましたか」「1か月前にどこにいましたか」という質問をされると、「いや、それはちょっと」という話をされる場合があるわけです。「誰にも言いませんから、私たちはちゃんと守秘義務がありますから、もしよければどこにおられたのか教えてもらえますか」と言うと、「実はどここの刑務所にいたんです」とお話になられるんです。「出てきてどうされたんですか」と尋ねると、一番は「引き受ける人がいなかった。それで、仮出所が認められず、満期出所になった。」と言うんです。

満期出所というのは、その刑は終わっているわけですから、その後の更生支援を受けようと思ったら、それなりの手続きを踏めば支援してもらえる枠組みはあるんですが、なかなかそのことを知っている人もいない。そういう中で満期出所をして、「そのままそこから先は、一市民として自己責任でやってください」と言われてもね。

でも、実際いまこの世の中で、例えばアパート一つ借りるにしても、保証人がいないということでアパートが借りられない。あるいは、「あなたはそもそもこのアパートを借りる前、どこにいたんですか」という質問をされた時点で、アパートの入居は難しくなる。いま、アパートとかに入れないことを、国土交通省では、「住宅確保要配慮者」と言うそうです。

例えば、大家さんの8割が入居させたくないと言っている人は誰かという和高齢単身者なんです。高齢の単身の人は、8割の大家さんが入れたくない。外国人については、7割の人が入居させたくない。たぶんホームレスになるとほぼ100%になります。あるいは、刑務所から出たといいましょうか。出てきた人になると、もう150%ぐらいの大家さんが入居させたくないという話になってしまいます。これが現実なんです。



そういう状況で、満期出所して出てきた人たちが、実はたくさんホームレスになっていました。これって、いわゆる家がないというだけの問題なのか。しかも、私たちは、実はいまだでホームレス状態の人たちの5、6千人と出会っており、アパートに入られた方が、今年で3,600人になったんです。「ホームレスの人って好きでやっているんでしょ」とか、「働く気がないからホームレスをやっているんでしょ」とよく言われるんですが、そうでもないんです。少し支援があれば、私たちの場合でいうと93%の人が自立されていきました。そのうちの約6割、58%が就労による自立です。ホームレスの自立が、イコール「生活保護」でもない。それぞれ自分の道を選択していくという中で自立されるんです。

しかし、実は一方でホームレス状態の方々の中の4割以上が、知的障がい者であるということも分かったんです。そうすると刑務所から出てきた人も、ホームレスになる人たちの中に非常に多いということ、同時にホームレスの中に知的障がいがある方が、非常に多いということ。こういうことがいろいろ分かってきたんです。そういう中で、私は下関駅放火事件と出会うことになりました。

先ほどのVTR、これが短編の1発目なんですが、2発目は、さらに1年間追ひ掛けたドキュメンタリーで、これは色々な賞を取りました。今日はその監督を務められた長塚洋さんが来られているんですけど、長編はさらにその先を追ひ掛けたVTRができています。これを見ても分かるように、長編の方は本名で出ているんです。いま流したVTRでは「ツダさん」という名前で出ていましたけれども、本当は福田九右衛門さんという方なんです。この方は、この下関駅放火事件も含めて過去11回放火等で捕まっています。裁判の中で繰り返しその障がいのことが問題になりました。今回も知的障がいであるということが問題になりました。

今回の事件は、福田さんがすでに74歳を過ぎてから起こした事件でしたので、実際、その時点でなかなか療育手帳を取るということは、難しいと思います。しかし、22歳から最初の放火が始まって、繰り返し裁判の中では、「この人は知的障がいだよ」ということが、ある意味、証明された。でも、残念ながらそれは量刑といましようか、刑を決めるための障がい認定、すなわち責任能力がどこまであるのかを問うためだった。つまり、法務省サイドでは、障がいの認定はされていたけれども、この方は、生涯にわたって厚生労働省の範疇である障がい者の手帳、療育手帳等を取ることができなかった。繰り返し「障がいだ」「障がい者だ」というふうに言われたけれども、1回もその障がいのための福祉を受けることができなかったというのが、この事件の非常に象徴的な場面になったんです。よくいう縦割りというやつです。法務省と厚生労働省の縦割りになったんです。

これでは駄目だろうということで、新しく動きだしまして、この事件の後、全国に地域生活定着支援センターという刑務所から出てきた人たちを引き受けて、地域生活が定着していくのを支援するというセンターが生まれたのも、この事件がきっかけだったんです。

NPO法人抱樸が取り組んできた支援 ～試行錯誤の日々を経て～

そういう中で、私は福田さんと出会いました。最初に私たち、NPO法人抱樸が、どんなふうに考えて支援をしてきたかというお話をしたいと思います。私たちは、いまから31年前に活動を始めました。最初はホームレスの支援から始まったんです。しかし、先ほど言いましたように、障がいのある方が多いと分かって障がい福祉の方もやりましたし、刑務所出所者が多いということが分かったので、更生支援の方もやるようになりました。

あるいは、例えばホームレスの6割の方が、最終学歴が中学卒業だということが分かって、いま、子どもの支援もやっているんです。さまざまな支援をやって、就労支援は当たり前にはやっています。いま27の事業をやってます。自分たちでアパートを運営していたり、施設を作ったりもしているんです。いまは何屋さんか分からない。最初は、ホームレス支援団体といわれていましたけれど、いまは人間支援団体、人（ひと）応援団体みたいになっているのが実情なんです。

その基本的な概念というか、基本的な支援の考え方が何かというと、「ハウスレス」と「ホームレス」という考え方なんです。「ハウス」と「ホーム」は違うということなんです。

最初に私たちは、おにぎりや豚汁を持って、ホームレスの人たち、野宿の人たちを訪ねてまわっていました。しかし、当然それではちががきませんでした。自立の支援をどうするかという議論になったんです。

1990年、初めてアパートに入居させるときは、なかなか大変でした。そもそも長くホームレスをされていると、行政手続き上、住民票が抹消されているという人が多いんです。そうすると、戸籍から住民票をもう一回起こさないといけないという手続きが必要になる。大家さんのところに行って、「住民票を出してください」と言われた瞬間に、住民票を出せないということになる。そこで（手続きが）止まっちゃうんです。保証人は、私になりますということで、なんとかしたんですけども、住民票を出せない。私は牧師なんですけども、うそばかりついて、「うちの教会のおじいさんで、長年入院されていたんです。その間に住所がなくなっちゃって、いま、戸籍しかないんです。今回新たに住民登録します」なんてことを言って、何人も何人もアパートに入れたんです。

不動産屋さんから、あるとき、呼び出されまして、「おたくの教会は、いったいどれだけの人が入院しているんですか」という話になって、「実は全部うそなんです。こうこうこういう理由で、ホームレスなんですよ」と言ったら、いい大家さんというか、不動産屋さんで、「そんなこともっと早く言えばよかったのに」って。「うそをつく必要はないですよ、ちゃんとやりますから」と言って、いま、北九州と福岡で53社の不動産屋さんの連携組織を作ったんです、居宅設置支援の会という。いまはいいですよ。もう情報を流したら、協力してくれる不動産屋さんが、すぐに応答してくれて、「ここあるよ、入っていいよ」という、そういう仕組みもできました。

でも、最初のころですから、うそばかりついていたんです。一番

最初のおじいさんは、70手前ぐらいの人でした。長年ホームレスをされていた人です。当時、私たちの問題意識は何か。つまり野宿の人が困っているのは何か。家がないということと、仕事がない。あるいは、食いぶちがない。高齢者で仕事ができなかったら、生活保護を受ける。要するに「住まい」と「食いぶち」の二つです。それで、私たちはアパートをなんとか借りまして、頭金等は、われわれがお貸して、そして、もう70手前の人でしたから、生活保護は申請できました。

われわれは、これで、やれやれ、これでOKだ。もうこれで問題解決した。だって、この一番大きな二つの問題が解決したんだから。われわれは、次の人の支援をはじめました。

半年もしないうちに、大家さんから電話があったんです。「奥田さん、この間入れたあのアパート、隣近所の人から、異臭がするから見に来てくれ」という話だったんです。「やばいな」と思いました。当時、われわれは、まだNPOでもないボランティア団体だったので、夜、みんな仕事が終わってから集まって、アパートへ行って呼べどたたけど出てこない。これは、何かまずいことになっているんじゃないか。ドアの隙間から臭いを嗅ぐと、異臭がしているんです、確かに。大家さんに言って、鍵を開けてもらいました。中へ入ると、もうライフラインが止まっているんです。電気も止まっている。懐中電灯を照らしながら、中へ入っていくと、3、40センチの高さにごみがざっと部屋の中に積もっているんです。ごみ屋敷状態になっているんです。

よく見ると、ごみの間に通路ができていて、みんなでカニ歩きしながら、中の部屋まで入っていくと、奥の部屋はさらにすさまじいごみの山になっていたんです。懐中電灯を照らすと、ごみの真ん中におじいさんが寝ていたんです。亡くなっていると思っていました。「おじいさん」って声を掛けたら、「なんや」って起きてきて、生きていたという話になったんです。

その後、私たちは、一晩かけて一生懸命アパートを掃除したんです。

さて、なんでこんなことになったんだろうか。おかしいじゃないか。問題解決しているじゃないか。家がないということと、食いぶちがない。この人は、70手前で生活保護をもらうようになったから、これでもうOKじゃないか。OKなのに、なぜこんなことになったんだろうかとわれわれは考えました。

二つの要因がある。一つは、この人自身の問題です。この人の中にある一定の何かの課題、例えば、障がい、知的障がいがあるとか、発達障がいがあるとか、もしくは生育歴の中で、生活を自立したことがない。自分で洗濯や掃除をしたことがない。この人自身の何か要因があったんじゃないかと考えたんです。

いまだったら、うちのスタッフがたぶん30分も面接していると、この人はたぶん知的障がいがあるなどというのはだいたい分かってくるわけです。文章なんかを書いてもらおうと、だいたい典型的な文章を書かれます。助詞が抜けます。「今日、僕、京都行った」とか、こういう感じで文章を書かれると、たぶん何かあるなどというふうに気が付いていくわけです。けれど、30年前、うちはプロのスタッフもいなかったんで、分からなかったんです。だけど、これだけじゃないぞ。二つ目の問題は何かだったか。みんなで考えたんです。何だと思いませんか。単純です。誰も訪ねていかなかったということです。

皆さん、どうですか。そんなことないよという人が多いと思いますけども、例えば、明日友達が泊まりに来るとか、明日、実家の母親が訪ねて来るとか、そういうことになると必死になって前の晩に掃除をしませんか。するでしょ。私もそうです。あれはなぜ掃除するんですか。訪ねてきてくれる人がいるからです。掃除をする動機を与えてくれる、その理由を与えてくれるのは、実は他者なんです。その他者性を失ったときに掃除しないといけないという理由がなくなるわけなんです。



働く理由もそうかもしれない。お金のために働くんだってみんな言うけれども、そうですかね。働くというのはお金のためとか、食べるためというけれど、厳密に言うと、誰かのために頑張ってるんじゃないですかね。

だから、掃除をするかしないかというのは、確かに掃除は誰も訪ねてこなくてもした方がいい。でも、このおじさんは、もともとホームレスを長くやっていた人なので、どちらかというごみの中に寝る方が得意なんです。この人が、アパートを掃除するという動機づけを与えるのは他者なんです。訪ねてきてくれる誰かなんです。誰も来なかったら、茶わん一つでいいですよ。でも、誰か来るんだったら、

茶わんは二つ、三つ用意しますよ。でも、誰も来ない。

私たちは、その二つ目の理由に気が付くわけです。つまり「自立、自立」というけれども、自立が孤立に終わるんだったら、それって本当に問題解決なのか。いくら食べることができても、いくらアパートが手に入っても、それが孤立に終わっているんだったら、それは駄目なのではないの。路上でおじさんたちは、こう言います。「畳の上で死にたい」っておっしゃる。でも、実際にアパートに入った人に、「これで安心ですね」っていうと、次におっしゃるのは、「俺の最期は誰が看取ってくれるやろうか」という。誰が看取るかという、その誰がという話にやっぱり入ってくるんです。

二つの問題に気づかせてくれたホームレスの言葉 ~本当のホームレスの意味~

私たちは、そういう二つの問題があるんだということに30年前に気が付いたわけです。その最初の問題、それは何か。家がないということに象徴される経済的な困窮です。これをハウスに象徴されるハウスレス状態と表現しました。

しかし、一方でいくら家があっても、いくら食べられても、訪ねてきてくれる人がいない。あるいは、自分を必要としてくれる人がいない。そういうことをホームがない、関係性がなくなっているホームレス状態と表した。「ハウス」と「ホーム」は違うということに気がついたというのが、その30年前の出来事なんです。

この概念を教えてくださいのは、実はホームレスのおじさんで、いまから30年前に、当時、全国で中学生とか高校生がホームレスを襲うという襲撃事件が起こっていたんです。北九州でも起こりました。もうほこほこにやられたおじさんが、私に相談に来られて、「なんとかしてくれ」という話だったんです。そのおじさんと中学校や教育委員会へ相談しにいったんです。そしたら、その相談の中でおじさんはこうおっしゃったんです。「1日も早くやめてほしい」と。命に関わると言いながら、こう言ったんです。「考えてみたら、夜中の1時とか2時にホームレスを襲いに来ている中学生というのは、家があっても帰るところはないんじゃないか。親はいても、誰からも心

配されていないんじゃないか。帰るところのない人の気持ち、誰からも心配されていない人の気持ちは、俺はホームレスだから分かるけどなあ」とおっしゃったんです。僕は、その言葉を聞いて、ああ、そうか。ここが問題だったんだ。単に家がないとか、単にお金がないとか、単に家族がいない、誰もいないだけじゃないんだ。家があっても帰る場所になっていない。家族や知っている人がいても、自分のことを必要としてくれる人、あるいは、自分のことを心配してくれる人がいない。それが問題なんだということに気が付きました。

だから、あのとき、おじさんから言わせると、「家に住んでいた中学生もホームレスなんだろ」というふうに言われたわけです。家があっても、ハウスレスじゃなくても、ホームレスでしょ。残念ながらこの30年間で、社会全体が路上に追い付いた感じです。単に路上の人は、逆に減ったんです。路上生活者って、京都でもそうでしょ。ほとんど見ないんじゃないですか。北九州もそうです。ほとんど見なくなりました。自立支援がうまくいったわけです。

でも、果たしてホームレス問題は解決していますか。どうでしょうか。家に住んでいてもホームレス。つまり関係を失っている。引きこもりの問題なんかを見ていると、やはりこれは孤立の問題です。

社会的孤立問題 ~「孤独」と「孤立」がもたらす社会への影響とは~

この間、裁判があった元農林水産事務次官の人は、息子が中学生時代から荒れていて、なかなか社会的な適応ができない、ある意味、中高年の引きこもりになっていた40代です。引きこもりに関して、国が出している推計値は115万4千人ですけれど、この推計値は見誤ったらいけません。なぜか。これは本人の数しか言っていない。

ある専門家がこう言っていました。「奥田さん、引きこもりって、日本にしかない現象なんですよ」と言うんです。「そんなことないでしょ、アメリカにも、ヨーロッパにも引きこもりの人はいるでしょ。若者で、社会的な適応が難しい子はいるでしょ」と言ったら、「それはいるんです」と言うんですよ、その専門家が。「じゃあ、先生、何が日本独特なんですか」と言ったら、長年にわたって親や家族だけが引き受けている。これは日本にしかないんです。例えばヨーロッパなんかは、ある年齢になると社会の中で引きこもっている。それはあるんだけど、最終的に全て身内の責任でやっているというのは、実は日本独特なんです。

元農林水産事務次官の場合も、たぶんあのお父さんは、誰にも相談できなかったんだと思います。そして、最後に周囲に迷惑をかけてはいけないと思い、息子を刺したと言うんです。周りに迷惑をかけてはいけないと思って、父親が責任を取るかたちで、息子を殺すわけです。事件が起きた夜のニュースで、私は衝撃を受けました。この元農林水産事務次官の先輩次官が、インタビューに答えていました。その人が、「この事件を見て、非常に衝撃を受

けた」っておっしゃったその後に、こうおっしゃったんです。「今回の事件の報道を受けて、あの人に息子がいたことを初めて知った」と言ったんです。これは一番衝撃でした。たぶん誰にも言えない中で、何十年にもわたって息子をずっと抱え続けた両親、しかももう年老いた両親がそこにはいたわけです。

何があっても殺すなんていう選択肢はあり得ない。これは間違った選択肢です。けれど、一方で親だけ責めていても、これはいいのかもしれない話ですよ。そこに社会があったのかということ。自己責任とか身内の責任で全てが終わるんだしたら、もう社会なんて要りません。国家も社会も地域もそんなものは要らない。全部個人でやってくれ、身内でやってくれと言えたら、それでいいでしょ。でも、そうはならないわけです。

私たちが見てきた30年間というのは、ハウスレス問題のみならず、ホームレス問題、人と人が孤立していく、社会的孤立の問題が非常に大きかったです。私は、先日、日本学術会議というところへ呼ばれて、いろんな実情を話してくれと言われ、話しに行きました。なぜそこに呼ばれたかということ、去年1月にイギリスが、大規模調査を行った。その調査によって、明らかになったのが何かということ、孤立です。孤独や孤立が、健康に対する被害、孤独が健康被害を出しているというのが分かった。

結論から言うと、孤独になると肥満になる、あるいは、たばこを1日15本吸う以上の健康被害が出ている。320億ポンド、医療費が多めにかかっているという調査結果を出したんです。320億ポンド

どれくらい大きいかというと、日本円で4.9兆円なんです。イギリスで4.9兆円の孤独の健康被害が出ているということになると、ものすごく大きなお金だって分かるでしょう。

でも、それだけでは済まないんです。実は、OECD（経済協力開発機構）というところが、国際調査で孤立率というのを出しているんです。イギリスの孤立率というのは5%なんです。孤立率ってどんな調査かという、日ごろ誰とも付き合わない、めったに付き合わない率なんです。人口の5%の人が、日ごろ誰とも付き合わない、めったに付き合わないというのがイギリスなんです。さあ、日本は何%でしょうか。これは、日本って緑の国でしょ。地縁だ、血縁だ、社縁だ、町内会だとやってきたでしょ。家族主義で、家族みんな仲良くと思っているでしょ。日本は実は先進国の中でも最悪の部類なんです。日本の孤立率は、15.3%。イギリスの3倍なんです。

ちなみにアメリカ。アメリカなんて孤立の最たる国だと思ってしまう。アメリカは、実はイギリスより孤立率が低いんです。3.1%。そうすると、日本はアメリカの5倍、イギリスの3倍、孤立している国なんです。しかも日本は、イギリスと比べると人口がちょうど倍、イギリスが6,500万人、日本は1億3千万人。そうすると、人口が倍で、孤立率が3倍ということになる。これを単純に4.9兆円に掛けると、2×3の6倍なので、30兆円規模になるんですよ、健康被害が。えらいことですよ、これは。

だから、30年前、何となく僕らが路上でつかんでいた感覚、つまり「ハウスレス」と「ホームレス」は違う。お金があるだけでは

駄目なんだ。お金にたどり着いても、人は幸せにならない。結局、自立しても孤立で終わっていたら駄目なんだ。そこには人が大事なんだということを、路上の風景について30年前から言い出して、いまから6、7年前、ここに来たときもこの話をして、「孤独が問題なんだよ」ということを言っていたら、なんと去年になって、国際調査で孤独や孤立が、これくらい経済的な損失も及ぼしているということが証明されるまでになりました。

イギリスから来ていた研究者の方が、こう言っていました。「イギリスは、全土で調査したんだけど、いまはパイロット的に幾つかのところで孤独に対する取り組みを始めた」と。その一つは、ソーシャル・プレスクライビングという社会的処方というのをやりだした。つまりお医者さんが、処方せんを書いてくれるわけです。日本のお医者さんの処方せんは、ほぼ薬ですよ、薬の処方せん。イギリスは、何を始めたかという処方せんで、例えばこの人は孤独が問題で病気になっているなどお医者さんが分かると、いろいろ話をして、例えば自転車が好きだというのが分かったら、「じゃあ、あなた、サイクリングクラブに加入しなさい。処方せんを書いてあげるから」と処方せんを書いてくれると、その費用を全額健康保険で賄ってくれるというんです。面白いですね。

実際に幾つかの地域において、パイロット的にやったらしいんですけども、医療費が20%落ちたというんです。孤独の問題というのは、結構大きな問題にいまなってきたりしているわけです。

「孤立」の原因 ~金の切れ目が縁の切れ目~

この孤独が、スパイラルしている。ぐるぐるまわり始める。孤独の問題とお金がないという問題。つまりお金がなくなると、人との縁が切れてしまいますよという話です。金の切れ目が縁の切れ目とよく言うでしょ。

私が住んでいる北九州市の場合、一般世帯、全世帯の高校進学率が97%。これが生活保護世帯になると、86%まで落ちます。やっぱりお金が厳しくなると、高校進学が難しくなるというのは、数値的にはっきりしているんです。金の切れ目が縁の切れ目です。あるいは、こんな数値もあります。正規社員の年収、男性の平均年収は521万円。これが非正規雇用になると226万円まで落ちます。正規と非正規で年収は半額以下に落ちるんです。これが女性の場合、もっと悪いです。正規雇用でも年収は350万円しかいかない。非正規で144万円。

これをちょっと頭に置いた上で、既婚率というのが出ているんです、国の調査で。結婚しているか、していないかの率なんです。

正規雇用の30歳の男性の場合、結婚している率が57%を超えるんです。約6割が30歳の正規雇用。つまり平均年収521万円の人の30歳時点での既婚率は6割なんです。これが、非正規雇用になると24.9%まで落ちるんです。やっぱりお金がないと、金の切れ目が縁の切れ目とよくいったもので、お金がないと結婚できないよという話にもなるわけです。

逆もまた真なりで、最初に言いましたね。人はなぜ掃除するんですか。それは、掃除しないといけない、清潔にしないといけないということもあるけれども、でも、それって本人がもういいやと思ったら、しないわけですよ、どうでもいいやと思ったら、でも、それでも掃除しないといけないと思わせるのは、他者の存在なんです。誰かが訪ねてきてくれるということに、いい意味で、忖度するわけです。おもんばかりのわけです。おもんばかりの対象がいると、掃除しないといけないという気持ちにもなるわけですよ。けれど、こういう人がいなくなると掃除もしない。

人は誰のために頑張るのか ~ホームレス経験者が語る事実~

働くという意味においてもそうです。私と一緒に講演にまわっている西原さんというおじさんがいて、この人はホームレス歴11年。いまは自立して、もう10年になります。この人と一緒に講演をまわりながら、生笑一座といって、元ホームレスのおじさんたちと一座を作って、いま、講演で全国をまわっているんです。いま、3万人くらいが見てくれて、120講演ぐらいしています。「生笑」というのは、生きてさえいれば、いつか笑える日が来る一座なんです。元ホームレスの体験を子どもにしゃべるわけです。一座というから「お芝居ですか」とよく言われるんですけど、自分の経験談をしゃべるんです。

ある小学校に行ったとき、小学生が西原さんに聞いたんです。「おじさん、なぜホームレスになったの」。彼はこう答えました。「いまから40年ぐらい前、結婚していました。子どもができて、子どもは2歳でした。おじさんは、あのころね」って、小学生の前ですよ。「おじさんは、あのころ、好き放題で」って言うの。そんなおじさんだっ

たので、「ある日、母ちゃんが、そんな父ちゃんだから、『お父ちゃん、ちょっとたばこを買いに行ってくるわ』と言って、夕方、家を出て、あれから40年、帰ってこないだけだなあ」って。「うちの母ちゃんは、どこまでたばこを買いに行っただろうか」って、そんな話を小学生にし始めたわけです。

2歳の子どもを残された西原さんは、しょうがないから実家に身を寄せて、おばあちゃんが子どもを育てながら、西原さんは長距離トラックの運転手になるわけです。それで稼ぎながら、おばあちゃんと息子にお金を渡していた。息子が20歳になったころ、おばあちゃんが亡くなってしまふんです。そして、息子は家から自立して、独立して出ていった。誰もいなくなった家に西原さん一人が残された。西原さんは小学生にこう言ったんです。「かっこいい言い方だけでも、おじさんね、ばあちゃんと息子を養っていたと思っていた」。現に養っていたんですよ。だから、頑張って仕事できた。でも、誰

もいなくなったら、財布に入っていたお金が、全部小遣いに見えた。好き放題使って、1年もしないうちに、大家さんから「家賃を払わないんだったら出ていってくれ」と言われて家を出て、それから11年、野宿生活が始まった。

どうでしょうか。人間は何のために働くんですか。いや、この問い自体が間違っている。人間は何のためにという、何じゃなくて、人間は誰のために働くか。ここが一番のポイントなんです。この誰がということをしたときに働く意味も、掃除する意味も、頑張る意味も失っていくわけです。再犯防止は大事ですよ。それはそうですね。いま、年間に刑務所へ入っている人の6割が再犯です。1回では終わらない。2回目、3回目になってしまう。うちの(福田)九右衛門さんは11回。なかなかできませんよ、こういうことは。

では、どうやったら再犯は止まるのか。就労支援だ、なんだと言われます。確かに就労支援も大事なんだけれど、お金の手当、それも本当に大事なんだけれども、やっぱり誰のために頑張るかということがないと、人間はやっぱり踏ん張れないんだと思うんです。こういうのは、国は極めて苦手です。就職の世話とか、アパートに入る支援とか、いろんなことはできるでしょう、制度的なことは。

でも、一番大事な「誰が」ということをやるのは地域なんです。われわれなんです。人は、最終的に何によって支えられるかということと人なんです。それは、どんな制度をつくっても駄目。制度では人は救えません。「多機関連携」ってみんな言うけれども、機関連携は大事だけれども、現場からすると、あそこの包括支援センターにはヤマダ何々さんという人がいて、あの人はすごく話が分かる人だから、あの人のところに電話しようかなと思うわけで、別にセンターに電話しているわけではない。やっぱり人連携なんです、多機関連携の中身は。そういう中で結局自分のことを大事にしてくれる、愛してくれるという人が、一人でもいるかということが勝負なんです。

だから、西原さんが言った「誰かのためにだったら頑張れたけれども、自分のためだったら、もうどうでもいいやと思って、全部小遣いになってしまった」という話。私は、それはそうなんだろうなと思うんです。つまり金の切れ目が縁の切れ目にもなるけれども、縁の切れ目が金の切れ目、働く動機を失うということ。同じように再犯しないとか、ここでもう一回頑張って、人生を取り戻そうというそのとき、何が一番の支えになるか。生活の安定。当然です。家がないと駄目です。仕事がないと駄目です。

でも、一方で誰がそこにいてくれるか、誰が横にいてくれるかというのがないと、再犯防止なんていうものは、いくら法律を作ってもできないということになるわけです。

ちなみに私たちは、3,500人以上をアパートに入れてきましたけれども、ホームレスに戻った人たちというのは、10%いません。いま、自立継続率は92%です。再犯率においてもほとんどありません。ただ、再犯はやっぱりあるんです。ほとんどないということは、一部あるということなんです。でも、考えてみてください。例えばうちにたどり着く人で傷害致死とか、中には殺人とか、現住建造物等放火とか、結構な人が来られるわけですけど。例えば人を殺してしまって、うちにたどり着いた人が、うちで頑張って、頑張ってやってきて、でも、やっぱり再犯してしまいました。次は万引で捕まった。またかよと



いうふうに見るか、成長しているよね。人を殺していた人が、万引で止まっているんだから、ランクアップしているというか、サイズダウンしているというか、おじさん、頑張ったよねって。普通だったら人殺しまでいったんだから、次は暴行ぐらいで、そのあとは強盗とかって挟みながら最後に窃盗ぐらいまで来るかなと思うけれど、一気に窃盗まで来ているということは、ものすごい成長の仕方。

こういう馬鹿なことを言っちゃいけないかもしれないけれども、でも、それを横でそうやって見てくれる人がいるかどうかなんです。そういうふうにもう励ましてくれる人がいたら、次はもうしない。なぜか。自分のためにしないんじゃないんです。応援してくれたあの人のためにしないんです。人間は、自分の生活が崩れていくのも人のせい。それでいいんです。「あいつがあんなことをやったから、俺はこうなったんだ」、「母ちゃんが出ていったから、俺はホームレスになったんだ」。それでいい。西原さんは、現にそう言ったんです、小学生に。「考えてみたら、40年前、母ちゃんが出ていったあの日、おじさんのホームレス生活の始まりだったのかもしれない」と言ったんです。

でも、この西原さんは、立ち上がる時も人のせい。みんなが応援してくれたから、ここは頑張らないといけない。人間としてここは頑張らないといけないと思って、11年の野宿の果てに、この人、野宿中はもう無礼な人で、草むらの中に住んでいるんだけど、お弁当を持っていても、博多弁で、「せからしか」って言うわけです。分かりますか、「せからしか」。「帰らんね、せからしか」って言うわけです。「せからしい」というのは、うとうしい、煩わしい。「せからしか」と言うわけです。「帰れ」とかって言うわけ。僕らがすごすごと、「分かった、また来週来るからね」と言って。ちなみに弁当はどうするかと思ったら、「それは置いていけ」とか言っていた人なんです、11年間。その人が11年目に立ち上がるわけです。それはなぜ立ち上がったか。

一つはリーマンショックでした。彼は、空き缶をずっと集めていたんだけど、リーマンショックで多くの若者が失業して、空き缶集めのライバルが現れたわけ。食べていけなくなったんです。生活が脅かされたのが一つ。もう一つは、11年間、「せからしか」と言っていたけど、それでも来てくれた人を信用したわけです。あの人たちに身を委ねてみようかといって、11年目に「助けて」って言うんです。再犯防止もやっぱり人なんです。

人のつながりの大切さ ～下関駅放火事件から気づいたこと、一人ぼっちにさせないこと～

下関駅放火事件においてもそうです。結局私たちは何をやったか。別に何もしていません。当然生活のベースを作ったりうんぬんはあります。でも、横についた、一緒に生きたというそこなんです。あの事件は、先ほど見ていただきましたので、だいたいもう皆さん様子は分かったと思います。2006年1月7日、ちょうど日付が変わった1時間50分後、下関駅は炎に包まれました。放火事件でした。私は、当時、北九州市におりまして、自宅におりましたけれども、ニュース速報が流れて、いま、下関駅が炎上している。すぐに画面が切

り替わったら、もう下関駅は真っ赤に燃え上がっていました。何があったんだろう。翌日の新聞で、74歳の住所不定の男性が、その場で逮捕されているというのが分かりました。さらに翌日の新聞には、その男性は、事件直前まで北九州市にいたということが分かりました。

私は、これは非常に傲慢な言い方かもしれないけれど、もし出会っていたら、こうなっていなかったんじゃないかというふうに考えました。これは1月6日から7日にかけての事件だったんだけど、1月3日にわれわれは、毎年、新年の炊き出しを始めていた。1月3日、裁判

の中で分かったのは、その日、彼は北九州市にいた、すでに3日に。だから、もし炊き出しで出会っていたら、これは防げたかもしれない。なぜか。さすがのわれわれも、出会ったその日にアパートに入れるということにはできません。それはできない。でも、人間って誰かとつながって、例えば、毎晩9時に電話をください、テレホンカードを渡しますからって、こうやっているってひどいことにはならないです。毎晩9時に電話くださいね。ただそれだけです。問題を解決したわけではない。問題解決よりも大事なものは、つながるということなんです。誰かとつながっているということなんです。もしそうしていたら、たぶん下関駅は、燃えなかっただろう。そういうふうにしたので、私はすぐに下関の警察署を訪ねました。しかし、その日は会えませんでした、取り調べ中ということで。幸い、現住建造物等放火なんだけれど、けが人が一人も出なかった。これは不幸中の幸いでありました。それでも駅を含めて、約5億円の損害。一か月ぐらい電車が止まりましたから、その損害も入れると、もうとんでもない被害になりました。

この放火の理由は、行き場所がなくて、刑務所に帰らなかったんだということを本人が言っているという話でありました。放火は駄目ですよ。私は、夜、訪ねてまわっていますから、外で寝る人たちの気持ちが、若干分かるけれども、特にこの季節になると本当に寒い。1月6日。この日は、非常に風が強い日でした。よく覚えています。だから、どれだけ外に寝るのが寒いかというのは分かっている。でも、それでも放火は駄目です。当たり前です。でも、皆さん、ビデオの中でも私が言っていましたけれども、じゃあ、あなたは放火をしてはいけません。これは100人が100人言えただろう。でも、あの日、あなたはこうすべきだったんだということを誰かが言えたのか。あの日の夜の選択肢は、社会の中にあつたのか。これが私の最大の疑問というか、宿題になりました。

事件の経過は、ビデオの中で簡単に触れられていましたけれども、ざくっと言うと、この人は刑務所を出所してから、8日間さまようんです。報奨金を持っていたんですけれども、知的障がいも手伝って、有意義に使えるなかった。有効には使えなかった。すぐに有り金が無くなって、もう年が明けたあたりで、すでにお金がなくなった。12月30日に福岡の刑務所を出てきているんです。それで、お金が無くなって、1月3日あたりから放浪し始める。裁判の中で詳しい事情を全部聞きましたけれども、今日は時間もありませんし、ざくっと言うと、病院で保護されたり、各地の福祉事務所で保護されたり、あるいは、自ら万引をしたり、もうすでに努力していたんですよ。実は一気に放火じゃなくて、刑務所へ帰るために、この人は2回万引をして、2回目のときは、自分から警察署に言って、「すみません、万引しました。申し訳ない。捕まえてもらえませんか」というような話になったんだけれども、残念ながら逮捕されなかったんです。それで、8つの公的機関と接触しています。2回、彼は万引をして、自ら出頭したけれども、逮捕されることもなかった。そして、最後の日を迎えるわけです。1月6日。

もともと「自分で逮捕してください」と言った警察署から、福祉事務所に連れて行かれて、その福祉事務所で生活保護の申請をするんだけど、当時、北九州市は、例のおにぎり食べたい餓死事件の前年だったんです。非常に厳しかった。それで、もともと京都出身なので、京都方面に向かう電車の切符、すなわち隣接市の下関市までの切符を渡したのは、行政機関であったということだったんです。8つの公的機関が関わったにもかかわらず、誰一人対応しなかったというのは、いったいどういうことなのか。

事件の3日後に私は差し入れを持って、下関警察署に行ったんだけど会えなかった。そして、1月27日に起訴されて、1月30日、拘留所での初めての面会になりました。この時点で前科10犯だったから、どんなすごい人が出てくるのかと思って、ちょっとどきどきしながら待っていたんです。出てきたら、小さなかわいらしいおじいちゃんだった。この人がと思うような方だったんです。先ほどの映像のそのままです。

私は、あらためて聞きました。「あなたは、なぜ火を付けたんですか」そしたら、彼は明確にこう答えたんです。「刑務所に帰らなかった。もう行き場がなかった。刑務所に帰らなかったんだ」という話をされた。「ただ、私は気持ちは分かるけれども、でも、それが理由で火を付けられた側は、たまったもんじゃありませんよ」と。「そんな理由で火を付けちゃ駄目ですよ」。このとき、私は裁判をまだ見ていないから、その前に2回万引していると知らなかったんです。「放火じゃなくても刑務所に帰れたでしょ」と。

「もうちょっとほかの手段はないんですか」という話を聞いたら、(福田)九右衛門さんが、アクリル板の向こうで、「実は」といって、おなかを見せられた。おなかの下のところ、大きなやけどの痕がありました。それはすごい大きなやけどでした。「どうしたんですか」と聞いたら、「実は、子どものころにおやじに風呂場(昔のまきの風呂)のたき口に連れて行かれて、そこでせっかんされた。火の付いたまきで、焼かれてしまった。以来、僕は」って言うんですけど、「僕はおやじと火を恨むようになったんだ」という、そんな話だった。私は、「それは大変でしたね。体の傷も消えないけれど、心の傷はもっと深い。それは本当に大変。でも、そんなことをされて、あなたの人生がおかしくなったんだら、あなたこそ人のうちに火を付けては駄目ですよ。あなたこそそういうことをされたら、どれだけしんどいかって分かっているんだから、それはしては駄目ですよ」と。そんなやりとりをしました。

その後には私は、いつも支援するときに必ず二つ聞くことがあるんです。一つは、「あなたの人生で一番つらかった日はいつですか」という話なんです。これは、支援の最低ラインを決めるということです。そうしたら、福田さんはこう答えたんです。「刑務所出所時に誰も迎えに来なかった。1回も迎えに来てくれなかった。これが一番つらかった」とおっしゃったので、「じゃあ、今回は僕が引受人になります。必ず迎えに行きますから」と言ったのが、さっきのあの場面、10年後の場面なんです。「迎えに来ますから」という話になった。

もう一つ、「じゃあ、あなたの人生にとって、一番うれしかった日はいつですか」という質問もするんです。これは支援の目標を決める。この人にとっての幸せって何なのかというイメージを作るわけです。「あなたにとっての一番よかった日、幸せだった日々はいつですか」。そしたら、うんと考えて、(福田)九右衛門さんはこう答えたんです。「そうだな。僕にとって一番幸せだったのは、おやじと一緒にいたあのころかな」っておっしゃったんです。僕はびっくりして、「そうなの」って。「だって、あなたが放火してしまう、ある意味、原因は、それはお父さんのせっかんだったんじゃないのか。そんなお父さんなのに、あのお父さんと一緒にいた方がよかったの」と言ったら、「やっぱり独りぼっちの方がつらい」と言ったんです。

この人の問題解決とは言わないとしても、どうやって支援していったらいいかというのは、もう明確なんです。一人にさせないということなんです。独りぼっちで刑務所出所という一番不安が高まるその日、それまで刑務所の中で、いわば監視体制に置かれているわけです。一人になりたくてもなれない中で、ずっと何十年も暮らしてき



た人が、ほんと世の中に独りぼっちで、ある意味、放り出される瞬間、そのとき、一番つらかった彼が、やっぱりあのおやじさんでさえ、虐待するようなおやじさんでさえ、一緒にいてくれるということが、自分にとってありがたかった。だったら、問いに対する答えは、明確じゃないですか。もう二度と一人にさせない。もう二度と一人にしない。そうしたら、この人は絶対に再犯しない。絶対という言葉は使いませんが、絶対再犯しないはずだということを、11年前の最初の面会のときに知ったわけです。

判決は、2008年3月26日になりました。その1回前の結審のときに、私は、この日、うちの子どもの卒業式だったので、初めて裁判の傍聴に行けなかったんです。途中で情状証人で出たりもしたんですけども、新聞記者から電話がかかってきました。

裁判所といっても、大きな事件であるにもかかわらず、傍聴に来ている人が一人もいないんです。私が1人座っているだけで、記者席だけは満席になっているという、そういう裁判です。いわゆる個人的な知り合いは誰もいないという、そういう裁判でした。そこで顔見知りになったある新聞記者から電話がかかってきました。「奥田さん、今日来たらよかったのに」って。「求刑はどうになりましたか」といったら、「18年です」って言われたんです。これは駄目だわと。そもそも出所してから、8日目だから、丸々出るんじゃないか。要するに求刑どおり判決が出るんじゃないか。18年になると、そのとき、もうすでに2年経っていましたから76歳。76+18、これは生きて出られないかもしれない。まずいなあと思いました。

でも、その後、新聞記者が、「今日来たらよかったのに」って言うてくれたんです。「何があったの」と聞いたら、求刑の後、裁判長が本人に「何か言いたいことはあるか」って聞いた。そしたら、そのとき、本人が、それまで2年間の裁判の中で、「ずっと刑務所に帰らかった」と言っていた福田さんが、「僕は社会にもう一度戻りたい。奥田さんのところに行きたい」という話を今日していましたよ。

そして、3月26日に判決があって、なんと判決は、当然実刑なんですけれども、懲役10年、未決勾留期間を600日認めるということで、実質8年だったんです。それが判決だった。私は喜びました。8年だったら生きて会えるかもしれない。76+8ですから、84歳で出てくる。これはなんとかなるかもしれないと思ったんです。私は喜びました。けれど、担当弁護士からは、「奥田さん、これはちょっとまずいよ」と言われたんです。「なぜ」と言ったら、「(求刑の)18年から見たら、実質8年というのは、半分以下だから、これ自体が控訴する理由になります」と。「これだと広島高裁にいてしまいますから、あとは広島の高裁と相談してください」と言われたんです。

でも、それでも一応判決が出たから、その日の夕方、山口の拘留所を訪ねていったんです。その後、たぶん移送されるだろうと思って、面会しに行ったんです。そしたら、当時、あまり表情を出さない方だったんだけど、その日、「福田さん、8年よ、8年。あなたにとって、責任を取るということは何か。それは、生きて出てくること。二度と犯罪を起こさないで、社会の中で生き、社会の中で死んでいくこと。これがあなたにとって責任を取るということなんだから、あなたは生きないといけないうええん」と言ったら、その日だけ僕の前で声を上げて泣いたんです。「うええん」と言っただけで泣いたんです。

それで、別れ際に「当分来られないから、差し入れを何かしようか、何か要るか」と言ったら、「ふええん」と言いながら、「ココナッツサブレが食べたい」と言っていました。

そして、私は、結局、その後、山口の地方検察庁に嘆願書を出すんです。もう控訴をやめてくれと。ご本人からも「僕は、いま、深く反省しています。検事さん、控訴しないでください。今度刑務所出たら」「を」が抜けるでしょ。「刑務所出たら、奥田さんのところへ帰って、一生懸命働きます」。「もう二度と同じ罪は犯しません。どうか検事さん、控訴しないでください。くれぐれもお願いします。



僕も控訴はしません」。

確かにこの人を裁くのも大事だけれども、でも、どうなんでしょうか。罪は罪です。最後に私の文章です。「裁かれて当然です。しかし、私は74歳の行き場がなかったホームレスの老人が、しかも刑務所にしか自分の居場所を見いだすことができなかった困窮孤立の老人が、再び生きる希望を見いだすことができる社会でありたいと思います。福田さんを生きて更生させることは、社会の側の責任であると思いますし、ホームレス化していく、孤立化していく現在の社会にとって、大きな希望となると信じています。上記のような事情です。どうぞ情状酌量いただき、控訴を断念していただきたい」という文書を届けて。

そしたら、控訴期限のその日、またその新聞記者から電話がかかってきたんです。僕はよく知らないんですけど、夕方5時で終わるんですかね、控訴の受け付けが。午後5時15分に電話がかかってきて、「奥田さん、今日、何の日か知っていますか」ってまず聞かれたんです。今日は何の日ですかと言ったら、「今日が控訴期限ですよ。いま、検察へかけたら、『控訴は断念した』と言っていますよ。刑が確定です。あとは奥田さんの出番ですから、8年後、頑張ってください」というのが新聞記者からの話だったんです。

この判決は、大きな意味を持ちました。裁判長もやはり高齢で障がいのある人が、いろんな支援を受けられないまま、刑務所を出てきてしまった。このことについては、やはり考えるべきだということを判決文に書きます。この判決が社会を動かして、地域生活定着支援センターという、刑務所を出所してくる高齢や障がいの方々の支援をどうするかという大きな仕組みを作り出すということの、一つの大きな動機を作ったというのは、実はこの事件でした。

福田さんの心境の変化 ～他を思う心、関係性の芽生え～

そして、8年が経ちました。先ほどVTRを見ていただいた場面です。出てこられて1か月経ったとき、ちょうど2016年の七夕なんです。最初に彼が我が家にいながら抱樸館に出入りするようになって、七夕を迎える。そのころ、抱樸館のデイサービスにも通うようになっていました。介護保険をちゃんと受けて、デイサービスに通うようになっていた。

そして、そのときにデイサービスの主任が、私のところに短冊を持って、走ってきたんです。「理事長、見て、見て」って。「何が」と言ったら、「(福田)九右衛門さんが書いたのよ、この短冊」といって見せられた。その短冊になんて書いていたかといったら、「自分の幸せ、みんなの幸せ」って書いていて。この人の中になった1か月なのに、みんなという概念が生まれ始めて、自分一人が幸せになるんじゃないって、みんなと一緒に幸せになっていくという関係性が芽生え始めているというのを見ました。

出所前、私は仮出所させてくれと国の方に頼みました。ぎりぎり2か月前になって、仮出所を認めました。国は、認めてくれたんだけど、その仮出所からの手前、私はまずは専門家を集めました。福岡県の地域生活定着支援センターは、抱樸がやっていますから、定着支援センターの呼びかけで、北九州市の保護観察所が中心になって、いろんな専門家を集めて、これだけ放火を繰り返した人

をどうケアしていくのかと。精神科医も入ってもらいました。いろんな専門的な知見を持った人も入ってもらって、いろいろ分析をしました。脳内物質がどうなっているとか、エンドロフィンがどうだとか、ドーパミンがどうだとか、いろんな勉強もさせていただきました。勉強すればするほど、これはやばいんじゃないか。これは引き受けられずいんじゃないかと。これは知らなかった方がよかったぐらいの話も、いろいろありました。

でも、出てきた後、結局、いま、何がどうなっているかというところ、もう今や専門家のケアの部分、初期の専門家が関わる部分は、ほぼ終了しました。一番頼りになったのは、北九州市の精神保健福祉センター長の三井先生です。その方に相談をしました。この先生が何度か本人と面接をさせていただいて、彼女(先生)が出してきた結論は、「この人はたぶん精神的なうんぬん、子どものときのトラウマはあるけれども、しかし、環境的なものがたぶん大きいと思う。それだったら、抱樸さん勝てますよ」と言われたんです。「それだったら、抱樸だったら勝てると思う。抱樸の環境に入れたら、たぶん彼は新しい人生を歩み出す。ももとの気質的なものというよりは、環境的なものの方が大きいと思うということをお勧めしてくれ」って。だったらって、われわれは、どれだけ人とのつながりを増やすかということに専念していくわけです。

再犯防止に向けた支援とは ～問題解決型から伴走型支援へ、「つながり」と「出番」の大切さ～

そこで出てきたのが伴走型の支援という考え方でした。伴走型の支援というのは何かというと、支援には二つの考え方があります。これは、厚生労働省が、いま、進めている地域共生社会の中に組み込まれたんです。これからの支援は、二つの軸によって行われるんだということが書かれた。

社会福祉士さんも大事だし、精神保健福祉士さんも大事だし、専門職の人を私たちは本当に頼りにしているし、私のところの職員にも、資格を取れということを勧めています。

でも、一方でもう一つの支援論が必要です。それは何かというと、いままでは問題解決するというのが中心だったんです。いかにして問題解決するか。けれど、放火してしまうという問題を解決するというのは、これって実は難しい。何を持ってその問題の要因がなくなっているかということを証明できないでしょ。例えばウイルスによって発熱しているんだとしたら、そのウイルスがいなくなれば、治ったということになるんだけど、放火するという要因においては、見えないところにあるわけだから、それをどうやったら解決してなくしてしまえるのか、その危険性を除去できるか。例えばがんを切除するように、その問題要因を切除してしまう。こういうことは、できないでしょ。

そのときにわれわれはどう考えたかというところ、もう一つの支援、つながるということを目的にする支援。問題解決はちょっと置いて、つながるということを目的とする。しかもこのつながるといって

いては、問題解決をする専門家集団という質の問題よりも、量が問題なんだと。質より量だと。専門家が問題解決するために、太いロープ何本かで本人を安心できるようにぐっとつなぎ留めるといって、場面も必要だけれども、伴走型支援というのは、100本、200本の糸みたいなもので、みんなで包むというイメージです。

専門家が2、3人で太いロープで5、6本のロープでぐっとつなぎ留めて、2、3本切れたらがたがたになってしまう。伴走型支援は、100本の糸ですから、5、6本切れても切れたことも分からないくらい、言葉は悪いんですけど、ごまかしの支援といっているんです。

どういうごまかしかというと、例えば放火をする要素があり続けているわけですね。(VTRにありましたが) 見ましたか、5本指の法則。「あなた、失敗する法則はなんだ」といったら、最初は「パチンコだな。パチンコの次は女だな」。「パチンコへ行って、女へ行ったらどうなるか」。「金がなくなるなあ」というわけです。「金がなくなったらどうなるか」。「家がなくなるなあ」というわけです。「家がなくなったらどうするの」といったら、「火を付ける」。「あかん、あかん、それは」。それが5本指の法則なんです。

こういうことを問題解決することを考えながらも、一方でどうするかといったら、この問題自体はなくなるんですよ。放火をするか、しないか。しかし、周りが何にもなくて、これがほんとであるとこれしかないですね。けれど、これ以外に彼が興味関心を示すようなものを、いっぱい作っていくわけです。そうすると、相対的に小さなものになっていく。

これをいままでの専門家は、アセスメントをして、何が主訴かといっていて、問題の本質を明らかに描き出すというのが、専門家の一番の仕事だったんです。放火するというのが主訴だとしましょう。これを明らかにして、これだけ見ながら、ここを総攻撃するんだといったら、どんどん顕在化していくんです。

伴走型支援って、これはこれでちょっと置いておいて、デイサービスというのがあるよって置いておくと、デイサービスに行くと、本人はデイサービスはお風呂に入りに行くんだみたいな、入れてくれるんだみたいなことで喜ぶでしょ。そうすると相対的に放火の部分は小さくなる。こういうものをいっぱい作って、つながりをいっぱい増やしていく中で、これはなくなっていくんじゃないんだけど、どんどん



と小さくなっていくという。ごまかしの支援というのは、そういう支援なんです。

あるいは、ある程度失敗するというを想定する。問題解決型の支援を中心に置いてきた人たちは、どうしても行き過ぎてしまう。それはなぜかと思ったら、問題を起こさせないための支援をしてしまう。

うちの抱撲館に入っている人で、もうド級のアルコール依存症の人がいました。地域で週に何回か呼び出されるぐらいのすごい人で、抱撲館に入ったんです。当然お医者さんは、問題解決型の一番の専門家だから、「この方は依存症ですから、断酒しかありません。完全断酒させましょう」ということで、完全断酒になった。朝からシアナマイドを飲んで完全断酒する。それまでお酒を飲んで、ほがらかだったその人が、お酒をやめて何カ月かするとどんどん暗くなって、人と話さなくなる。

うちの支援員に、「あの、断酒はうまくいっているみたいだけれども、彼が断酒しているということの意味ってどこにあるの。何のために彼は断酒をしているの。あれだけ暗くなって、あれだけ人としゃべらなくなってしまふ。これは彼にとって何が幸せなの」。そんな話が始まったんです。そして、私はこう言ったんです。「伴走型の支援の考え方からすると、君たちは、ある面、この人の権利を侵害している」。うちのスタッフは怒って、「何が権利侵害ですか。私たちは、あの人を守っているんです」というような話になった。「いやいや、君らは権利を侵害しているんだ」「何の侵害ですか」というから、「失敗する権利を侵害している」。つまり、解決型の支援しか考えていない人は、先回りして、その人の人生が失敗しないように考えている。どちらかというと、ガードレール型の支援です。

しかし、われわれが考えている伴走型の支援は、セーフティー

ネット型の支援。セーフティーネットって、空中ブランコの下に張っているネットです。あれは、落とさないためのネットじゃなくて、落ちてもしないためのネットですよ。伴走型支援は、先回りしません。本人が気付くまで待つし、本人が失敗したら、そこに伴走していただけたら、現に保護観察官が来て、ちょっと失敗をやらかしちゃったぞというのがありましたけれども、それもまた伴走して行くんです。もっと言うと、その日こそ、つながるチャンスなんです。そこで俺たちは見捨てないよ。あなたと一緒に行くよということをやっていく。この辺が伴走型支援なんです。

われわれの伴走型支援の考え方という、いま福田さんがなぜ3年以上にわたって、再犯を繰り返さない、もう火を付けない。そういう中で暮らしているのか。単純です。つながりが増えたからです。もう一人にさせないということをみんなが考えたからなんです。案外答えは身近にあるかもしれません。ものすごく高度な技術論とか、法律論とか、制度論とか、いまみんな議論しているけれど、それも本当に必要だし、国は本腰を入れないといけなないかもしれないけれども、うちの現場からすると、実は答えはもっと単純。もっと身近に、どれだけつながりを増やすか、一人にさせないかということです。

さらにつながりと出番です。88歳になった福田さんが、ボランティアになって、今度は炊き出しでお茶を配っている。抱撲館で物資が集まってくると、その物資の仕分けをしている。自分には役割がある、出番がある。つながりと出番が、最も大事だというのが私たちの結論です。

では、そろそろご本人に。さっきから前で笑ったり泣いたり、笑ったり泣いたりを繰り返していますから。88歳にもうなれたんですけど、今日来られているので、ちょっと（福田）九右衛門さん、前に出てきませんか。

福田九右衛門氏登壇 ※以下は奥田氏と福田氏の当日のやりとりです。

- 奥田 背中を伸ばして、お名前は。
- 福田 福田九右衛門。
- 奥田 福田九右衛門さんです。珍しい名前ですよ。九右衛門ですよ。歌舞伎役者かと思うような名前ですけど。お幾つになられましたか。
- 福田 88歳。
- 奥田 ありがとうございます。ちょっと聞きにくいことを言うよ。今日は、聞きにくいことを聞きたい人ばかりだから。下関駅（放火）事件で、九右衛門さんと私は出会ったんですけども、もう1回あらためて聞きますけれども、なぜ火を付けちゃったの。
- 福田 行くところがなかったし、寒かったし。
- 奥田 やっぱ九右衛門さんにとって、あのとき、あの日、刑務所しか行くところがなかった。
- 福田 はい。そうです。
- 奥田 助けてくれる人はいませんか。
- 福田 誰もいません。
- 奥田 何回か万引きとかして、本当はもっと早く刑務所に帰ったかったよね。
- 福田 はい、そうです。
- 奥田 だから、別に裁判でむしゃくしゃしたとか、駅を全焼させようという意図でやったとか、結構裁判ではそういう理由でやったんじゃないのかというようなことを言われたけれども、僕は裁判の際に横で聞いていたけど、決して駅を燃やす目的じゃなかったよね。
- 福田 はい、そうです。
- 奥田 帰りがかった。
- 福田 はい。
- 奥田 福田さんって88年の人生で、刑務所に52年間お世話に

なっているんです。これは本人にとってもよくないというか、不幸だと思うし、刑務所って結構金がかかっていることを知っていますか。浜井先生の本をよく皆さん読んでいただきたいと思いますけれど、私もあの本を読んで、裁判ってこんなにお金がかかるのかとか、いろんなことを知ったんですけども、正直、刑務所って、そんなに帰りたいようないい場所なんですか。

- 福田 そうですね。
- 奥田 よかった。
- 福田 いや、いいことはない。
- 奥田 じゃあ、刑務所で嫌だったことってどんなことですか。
- 福田 自由が利かないこと。
- 奥田 それはそうだね。刑務所へ行って自由だったら、みんな行くよね。さっきご飯の場面で、5分ぐらいで食べちゃうんですね。早飯なんです。やっぱり時間は厳しかったですか。
- 福田 厳しかった。



- 奥田 ご飯は何分ぐらいで食べるんですか。
- 福田 早いんですね。4分ぐらいで食べる。
- 奥田 お風呂は。
- 福田 お風呂は15分ぐらい。
- 奥田 決められているんだ。
- 福田 はい。
- 奥田 用意ドンで始まって、上がれって。
- 福田 はい、そうです。
- 奥田 私は、8年間の間に、刑務所に何回も面会に行ったんですけれど、うちは（地域生活）定着（支援センター）もやっているの、特別面会ということで、配慮して下さったんです。アクリル板越しじゃなくて、普通の応接室で会っていいですよという話になった。喜んじゃって、刑務所のルールも全然分かっていなくて、だから、二人が入ってきた瞬間に、「おお」とか言ってハグしていたんです。こっちも泣くし、私も泣いているし。次に面会に行ったら、刑務官から呼ばれて、「奥田さん、前回の報告で、奥田と福田が身体接触した。これは本来懲罰対象です」みたいな話になって、「えっ、握手したら駄目なの」みたいな話になって、「すみません、記憶にありません」と言い通したんですけれども、やっぱり厳しいよね、刑務所の中は。
- 福田 ええ。厳しいです。
- 奥田 だから、本当は刑務所に帰りたいかかったというの、刑務所しか帰るところがなかったということですかね。
- 福田 はい、そうですね。
- 奥田 本当はどこに帰りたいかかったの。
- 福田 奥田さんの・・・。
- 奥田 それは出会ってからのね。なるほど。あと何を聞こうと思ったのかな。じゃあ、いまは福田さん、何をしていますんですか。日常生活で一番楽しいことは何ですか。
- 福田 毎日、デイサービスに。月曜日から金曜日まで行っています。
- 奥田 いま、うちのデイサービスの常連さんなんです。デイサービスの方は、みんな優しいですか。
- 福田 優しいです。
- 奥田 抱樸館でよくトランプしているでしょ。
- 福田 はい。トランプしています。
- 奥田 何やっているの。
- 福田 タケウチさんとか、ツルタさんとか、女の人も（一緒にトランプを）やっています。
- 奥田 女の人もやっている。それで、トランプでなんていうゲームをやっているの。
- 福田 七並べ。
- 奥田 この間、福田さんが東京かどっかで買ってきたトランプなんだよね。
- 福田 そうです。
- 奥田 福田さん、みんなのためにトランプを買ったんですよ、お土産で。このトランプのデザインが、こんな大きなトランプ



- ンプで、デザインが1万円札をそのまま1億円って書いた。売っているでしょ、時々そういうのが。これを抱樸館のレストランで、みんなで七並べしている。時々、取材の人が来て写真を撮って帰ると、札束を持ったやつらが、テーブルを囲んで札束を持って、（トランプを）やっている写真が報道で出たりするので、あのトランプはどうかと思うんですけど、七並べはめっちゃくちゃ、みんな強いよね。
- 福田 はい、そうです。
- 奥田 僕が入ると、絶対負けますね、七並べは。
- 奥田 福田さん、これからどんなふうに生きていきたいですか。
- 福田 どうか。デイサービスに行くと（1日の）時間が短い。
- 奥田 なるほど。刑務所のときは、時間が長かった。
- 福田 時間が長かった。
- 奥田 1日が長かった。それで、52年もいたら大変よね。この頃は1日が早い。
- 福田 早いです。
- 奥田 なぜでしょう。
- 福田 デイサービスに行っているから、時間が短い。
- 奥田 やっぱり人間って楽しいところにいると、すぐ時間が終わっちゃうんだね。
- 福田 うん。
- 奥田 なるほどね。そんな日々を送っています。一番の友達は誰ですか。
- 福田 タケウチさんとか、ツルタさん。
- 奥田 友達もたくさんできて。ここだけの話だけど、この間、ちょっと耳に挟んだんだけど、彼女ができたって。
- 福田 はい。彼女は4人います。
- 奥田 実はね、気を付けた方がいいですよ。文通すると全部彼女にカウントされますから。お手紙をもらって全て彼女になってしまうんです。いま4人の彼女がいるの。
- 福田 はい。
- 奥田 なるほど。中でもよく福田さんを訪ねてきてくれる、応援してくれる彼女がいますよね。
- 福田 はい。
- 奥田 なんていう人ですか。
- 福田 Aさん。
- 奥田 Aさんね。とても周りの人からも愛されて、支えられて生きています。とてもいい福田さんです。
- 福田 水族館に行ったり。
- 奥田 水族館に行ったり。
- 福田 カラオケへ行ったり。
- 奥田 カラオケへ行ったり。なるほど。よかったね。じゃあ、福田さん、結局人間が生きていくというか、例えば、いま世の中は、再犯防止といって、1回罪を犯した人が、2回、3回と罪を犯さないようにみんなで応援しましょうっていうわけよ。今日もたぶんそういうふうなテーマを考えている人たちが、それに関わっている人たちが、たくさん今日来てくださって、福田さんみたいに行き場がなくて困って、結局、結果的に犯罪を犯すような、一番不幸な。そうでなくても、行き場がないというのが不幸になっているわけだから、さらにその先、犯罪を犯してしまうという、罪を犯してしまうということにならない、人間にとって一番大事、これは大事だって思うのは何ですか。
- 福田 みんな友達が多い方がいいです。
- 奥田 やっぱり友達がいると違いますか。
- 福田 違います。
- 奥田 なるほど。じゃあ、逆に言うと、下関駅（放火）事件までの間は、福田さんは友達がいなかった。
- 福田 ええ。いません。
- 奥田 それが一番つらい。

- 福田 はい。
- 奥田 なるほど。じゃあ、長塚さんから聞かれていたけれども、もう一回、あらためて聞かしてくれど、もう火は付けませんか。
- 福田 付けません。
- 奥田 よかった。付けないと思いますぐらいにとどめられたらどうしようかなと。付けないと思いますと言われてたら、連れて帰らず、京都に置いて帰ろうかなと思っていました。88歳ですけども、幾つまで頑張りますか。
- 福田 100歳まで生きたいと思います。
- 奥田 じゃあ、今日は呼んでいただいて、本当にありがとうございますということで、お礼を言いますか。
- 福田 皆さん、ありがとうございます。
- 奥田 もう泣いています。感謝するとありがたいと思って、すぐ泣いちゃうんです。人間をいい人とか悪い人とかと区別すること自体も、失礼な言い方だと思うけれども、私にとってはとてもすてきな方だし、若いころは知りませんよ。若いころは、ひょっとしたらもうちょっと厳しい面があったのかもしれないけれども。でも、この方が52年間刑務所で過ごしてきたということは、いったい何なんだろうかというふうに、やっぱり考えざるを得ないです。それしか本当になかったんだろうか。しかもそれが全て本人の自己責任なんだろうか。自己責任というのが、いまものすごく、例えば私が最初に話した元農林水産事務次官のお父さんも、自己責任、身内の責任で全てを負ったということですよ。でも、本当にそうなんですか。私は、やっぱりもつとほかの選択肢があつていいというふうに思うんです。なんとかしないとやっぱり犯罪を犯した人たちが悪いんだ、悪いことをしたらその報いは受けるんだということだけで、私たちは目の前の問題から逃げてきたのではないかというふうに思うんです。

私は、福田さんと出会って、私自身、うちの夫婦は役割を与えられたし、福田さんから、時々、刑務所から来る手紙に、必ず書いているのが、「今度出所したら、奥田さんたちが迎えに来てくれる。僕はそれが楽しみで待っています」ということを必ず書くんですよ、この人はずっと。その筆で、「時々、僕は奥田さんのことをお父さんのように思っています」って書いてあるんです。ちょっと待ってよ。俺は、年が30歳も下なんだから、頼むわっていいながらなんですよ。だから、ある意味、無垢な魂を持った人が、なぜ52年間刑務所にいなければならなかったんだろうか。そのときにわれわれ社会の側の責任は、本当になかったんだろうかということ、私は常々考えています。

今日、人前でこういうビデオを上映したりとか、顔を出したり、話すというのはとても勇気のいることだけれども、実はこういう場に呼んでいただくことが、福田さんにとっては、いま生きる意味を皆さんが与えてくださっているという場面でもありました。本当にありがとうございました。どうもありがとうございました。

- 司会 大変貴重なご講演、そして、その後、福田様にもご登壇いただき、いろいろとお話を聞かせていただきました。お約束の時間が来ておりますので、今回はフロアからの質疑応答は行いませんけれども、どうか皆さん、それぞれ皆さんの中で、今日大きな問い掛け、そして、大きな示唆があつたかと思えます。またそのことを考えていただければと思います。

大変有意義な時間を共有できましたこと、大変うれしくありがたく思います。いま一度、奥田様、福田様に対して、大きな拍手をお願いしたいと思います。(会場から拍手)





第10回 矯正・保護ネットワーク講演会開催案内

主催：龍谷大学矯正・保護総合センター

ケーキの切れない 非行少年たち

参加費無料

要事前申込

先着100名様

※新型コロナウイルス感染予防のため今年度は参加人数を100名に限定させていただきます。

〈講演者〉

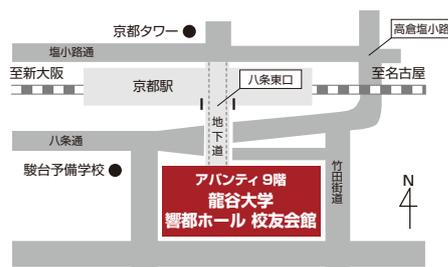
立命館大学教授
一般社団法人)日本COG-TR学会代表理事

みやぐち こうじ
宮口 幸治氏



2020年 **12月19日(土)**
13:30~15:00 (開場 12:30~)

龍谷大学 **響都ホール 校友会館**
(京都市南区東九条西山王町31 アバンティ9階)
JR京都駅八条東口より徒歩約1分



▶プロフィール

立命館大学産業社会学部・大学院人間科学研究科教授。
京都大学工学部卒業、建設コンサルタント会社勤務の後、神戸大学医学部医学科卒業。神戸大学医学部附属病院精神神経科、大阪府立精神医療センターなどを勤務の後、法務省宮川医療少年院、交野女子学院医務課長を経て、2016年より現職。
医学博士、子どものこころ専門医、日本精神神経学会専門医、臨床心理士、公認心理師。児童精神科医として、困っている子どもたちの支援を教育・医療・心理・福祉の観点で行う「日本COG-TR学会」を主宰し、全国で教員向け等に研修を行っている。

参加お申込み

参加をご希望される方は、事前にお申込みが必要です。

インターネットから

- ①矯正・保護総合センターホームページ (<https://rcrc.ryukoku.ac.jp/>) の「講演会等のお申込み・資料請求」ボタンをクリックしてください。
- ②「お申し込みフォーム」の必要事項(名前・住所・メールアドレスなど)を入力し、内容確認後、送信ボタンをクリックしてください。
登録されたメールアドレスに受付完了メールを返信いたします。

FAXから

以下の参加申込書に必要事項をご記入の上、送信してください。

お問い合わせ

龍谷大学 矯正・保護総合センター
TEL:075-645-2040 FAX:075-645-2632
〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67 至心館1階内
<https://rcrc.ryukoku.ac.jp/>
E-mail: kyosei-hogo@ad.ryukoku.ac.jp

2020年12月19日 第10回矯正・保護ネットワーク講演会参加申込書

フリガナ	当ではまるものに○をしてください。						
お名前	性別	男・女	年齢	10代	20代	30代	40代
				50代	60代	70代以上	
ご住所	〒						
電話番号	FAX番号						
メールアドレス	ご所属・ご職業 (差し支えなければ)						



075-645-2632



「実証研究プロジェクト」の活動内容（取組）について

EBP（Evidence Based Policy）という言葉を知っていますか。日本語に直すとエビデンスに基づいた政策決定となります。1995年の地下鉄サリン事件、1997年のサカキバラ事件、2001年の大阪教育大学附属池田小学校事件、2008年の秋葉原通り魔事件、2015年の川崎市中1男子生徒殺害事件など、犯罪対策が社会の注目を集めるのは、残念ながら凶悪な事件が起きた後です。そして、事件に対する強い憤り、事件を起こした加害者に対する憎しみや被害者の無念を晴らしたいという感情の高まりから、とすると監視の強化や厳罰化といった力（威嚇）による再犯防止が叫ばれがちです。それは、凶悪犯罪を起こした加害者が普通の人間ではないモンスターのように見えるからです。モンスターに理屈は通用しません。力で倒さなければならないとなります。しかし、刑務所に人間はいますがモンスターはいません。私が矯正施設で会ってきた殺人犯の多くは気弱でおどおどした人たちでした。社会の中で孤立し、生きづらさを抱え、助けてくれる、犯罪を止めてくれる人がいなかった人たちです。力による犯罪対策は、闇夜に小動物に怯えて周囲に銃を乱射するのと同じです。流れ弾で周囲が傷だらけになって被害が広がってしまいます。1995年以降の厳罰化の結果、刑務所は社会から孤立した高齢者や障害者によって養護施設化してしまいました。

現在、世界中で新型コロナウイルスによるパンデミックが起きている。感染症も犯罪も、科学を使って正しく恐れることが重要です。つまり、問題となっている事実を正確に分析、実態を理解し、その上で有効かつ副作用の少ない解決策を科学的方法で探ることです。某大統領が新型コロナウイルスは消毒薬

で死滅するから消毒薬を体に入ればよいのではと聞いていたが、そんなことをしてしまったらウイルスの前に人間が死んでしまいます。犯罪対策も同じです。

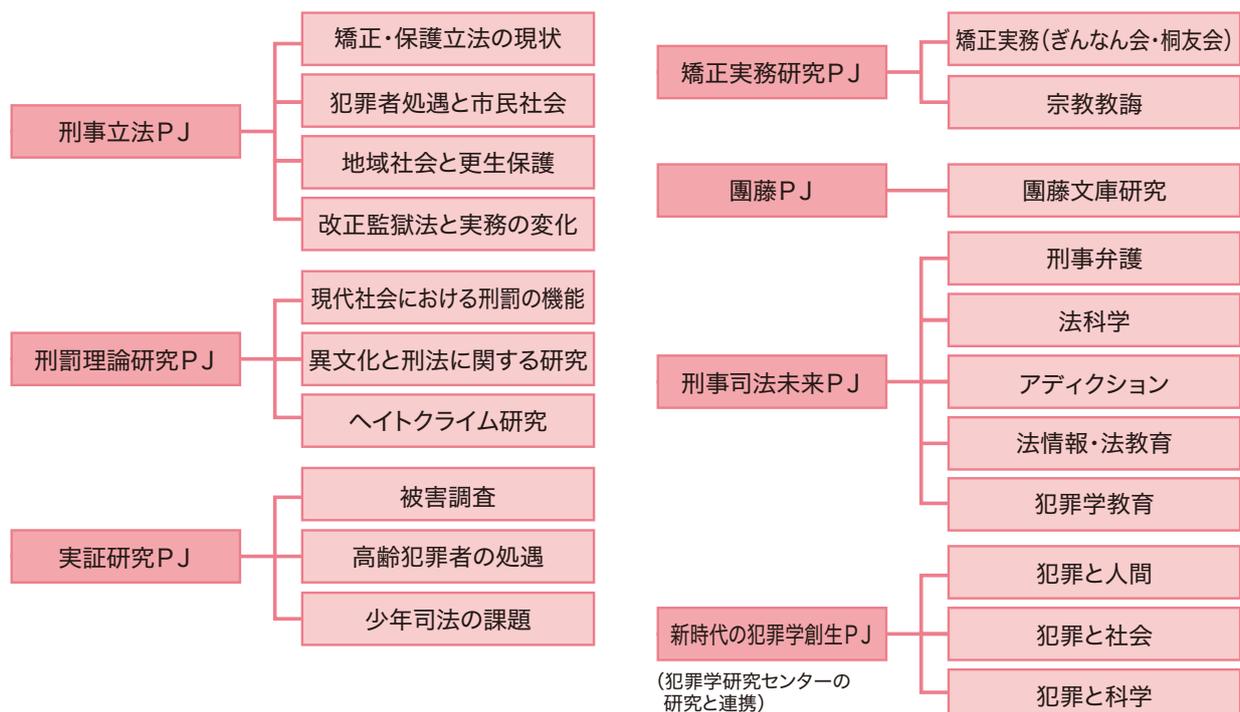
本プロジェクトでは、統計学や疫学を活用しながら科学的な方法で犯罪実態に迫り、有効な対策を提言しています。具体的には、現在世界的に大きな問題となっているドメスティック・バイオレンス（DV）、その中でも女性に対する暴力被害の実態調査をヨーロッパ連合（EU）の研究機関と共同で実施し、その結果をメディア等で公表するとともに、政策提言を行っています。また、日本で問題となっている高齢犯罪者増加の実態やその原因などについて、認知症などとの関係性にも着目しつつ分析し、自治体とも協力しながらその解決策について提言を行っています。さらに、少年法適用年齢の引下げについても、日本の少年非行の実態と現在の少年司法が果たしてきた役割を分析しながら、少年院に収容される少年に、発達障害などを背景に社会にうまく適応できないまま社会的に孤立した非社会性の強い18歳以上の少年たちが増えている実態を指摘することで、少年法適用年齢の引下げがもたらす弊害についての政策提言なども行ってきました。

実証研究プロジェクトでは、「科学を使って犯罪を正しく恐れる」をモットーに、これからも再犯防止や更生支援の分野を中心に科学的な見地からの政策提言を続けていきたいと考えています。

実証研究プロジェクトメンバー

浜井 浩一（龍谷大学法学部教授）

2020年度 矯正・保護総合センター研究プロジェクト





『龍谷大学矯正・保護
総合センター 研究年報
第9号 2019年』

[編集発行者]
龍谷大学矯正・保護総合センター
[発行所]
株式会社現代人文社
[発行日]
2020年2月28日発行



ISBN978-4-87798-755-8

『矯正講座
第39号 (2019年)』

[発行者]
龍谷大学矯正・保護課程委員会
[編集者]
矯正講座編集委員会
[発行所]
株式会社成文堂
[発行日]
2020年3月1日発行



ISBN978-4-7923-3395-9

『刑事施設の医療を
いかに改革するか』

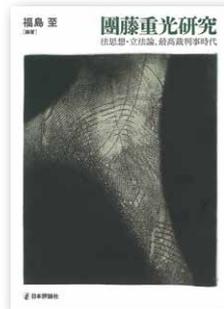
[編著者]
赤池 一将
[発行所]
株式会社日本評論社
[発行日]
2020年2月25日発行



ISBN978-4-535-52476-7

龍谷大学社会科学研究所叢書第128巻
『團藤重光研究
—法思想・立法論、最高裁判事時代』

[編著者]
福島 至
[発行所]
株式会社日本評論社
[発行日]
2020年2月29日発行



ISBN978-4-535-52471-2

龍谷大学社会科学研究所叢書第129巻
『新時代の犯罪学
—共生の時代における合理的刑事政策を求めて』

[編著者]
石塚 伸一
[発行所]
株式会社日本評論社
[発行日]
2020年2月25日発行



ISBN978-4-535-52478-1



龍谷大学 矯正・保護総合センター

- 京阪「龍谷大前深草駅」下車徒歩約8分
- JR奈良線「稲荷駅」下車徒歩約13分
- 京都市営地下鉄烏丸線「くいな橋駅」下車徒歩約5分

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67 至心館1階内
Tel.075-645-2040 Fax.075-645-2632
URL <https://rcrc.ryukoku.ac.jp/>
E-mail kyosei-hogo@ad.ryukoku.ac.jp